

## 正倉院文書、天平宝字二年の

### 東大寺大仏殿廂絵作画文書の継文について

長 島 由 香

#### はじめに

東大寺正倉院に収蔵される彩色豊かな宝物の中には、日本で制作されたものも数多く存在するという。その彩色は誰の手により、どの様にして施されたのであろうか。大宝令・養老令に規定された画工司は、正史にほとんど見えないが、東大寺正倉院に伝来した正倉院文書には数種の作画文書が残り、画工も散見する。従来の奈良時代の画工研究は、正倉院文書を利用した文書内容からの考察のみで、正倉院文書全体を視野に入れた研究は少ないように思う。近年の正倉院文書研究<sup>1)</sup>の進展は著しく、文書性格の検討や接続の復原という観点から再検討することにより、奈良時代の画工研究において新たな知見が得られると考える。そこで、まずは作画文書として正倉院文書にまとまって残り、文書内容からの先行研究も多い天平宝字二年（七五八）の東大寺大仏殿廂絵作画文書を探り上げ、考察を加えたい。

東大寺大仏殿廂絵作画文書として 文書「画工司移 東大寺」、文書「造東大寺司召文（案）」、文書「造東大寺司政所符 絵所領等」、文書「画所解 申請用雜物并残及人散事」、文書「画師行事功錢注進文」、文書「画

師行事功銭注進文」、文書「画師行事功銭注進文」、文書「画師行事功銭注進文」、文書「大仏殿廂絵画師作物功銭帳」が挙げられる。なお、文書「文書を整理し 短冊1」「短冊4」に図式で示す。

上村順造氏は文書内容の検討から、文書を除く文書「文書が東大寺大仏殿廂絵作文書であることを明らかにされた<sup>②</sup>。また、山口英男氏は文書を除く文書「文書を「東大寺大仏殿廂絵画師継文」、文書を関連文書とされる<sup>③</sup>が、その詳細は明らかにしていない。そこで、本論では文書「文書の文書性格を検討し、「短冊」という特殊な表を用いて接続の復原を試み<sup>④</sup>、継文編成の過程と目的を考察することにより、文書を加えた文書「文書が東大寺大仏殿廂絵作文書の継文であること、また、その伝来の経緯を明らかにしたい。

## 一 文書性格の検討

まず、文書「文書の文書性格について、文書の発信者と受信者、文書が正文であるのか案文であるのかを中心に検討を加えたい。

文書は、画工司から造東大寺司政所への移で、東大寺大仏殿廂絵の作画に伴い画工司から造東大寺司に派遣される画工司の佑と画工の歴名を記し、画工の本貫を注記する。自署「乙万呂」と不在を示す「別当」との注記があり、『影印集成』図版に「正正六位上辛」とあるものの「正正」の訂正は見られないので、画工司から造東大寺司政所へ送られた正文であろう。

文書は、文書の「画工司移」を受けて作成された造東大寺司から画工への召文で、「月 日参」と追記された画工も見える。「次官高麗朝臣」、「判官川内恵師」の自署がないこと、見せ消ちがあること、日付が「天平宝字二年二月廿」と書きさしになっていることから、造東大寺司政所の案文と考えられる。

文書は、造東大寺司政所から絵所の領等へ画料と共にもたらされた符形式の進送文書（送り状）である。「次官高麗朝臣」・「判官川内恵師」の自署はないが、「主典美努連」に自署「奥万呂」と見え、造東大寺司内で遣り取りされた文書であることから、造東大寺司政所から絵所へ送られた正文である。なお、この作画に伴い政所の下に絵所（画所）が設置されたことが分かる。

文書は、画所が「請用雑物并残」及び「人散」の事を造東大寺司政所へ報告する解形式の文書で、尾欠のため年月日未詳である。画料名とその数量を記し、「自「政所」請」等の画料の支給元を注記する。『影印集成』解説に本文四・七・一七行に「文字書き出しの高さを訂正する朱書符号あり」とあることから、画所の案文と考えられる。

文書は左方で、文書は右方で行われた須理板の作画について、作画工程別（彩色・堺・木画・塗白土）に画工名とその作業量・功銭料を記した行事報告である（但し、文書に功銭料の記載はない）。文書は左方で、文書は右方で行われた蓮花枝と花実の作画について、文書・文書と同様に作画工程別（彩色・堺・木画・塗白土・堺朱沙并墨・塗白土緑青同黄）の行事報告である。文書・文書には下道主による朱書の算勘が見え、自署があることから、文書と文書は左方から、文書と文書は右方から、左方・右方を束ねる画所へ提出されて下道主の算勘を受けたのであろう。

文書は、作画毎に所属別（画工司人・式部位子・司人・里人）の画工名とその作業量・功銭料が記され、後欠である。大仏殿廂絵の全作画終了後、画工への功銭支給のため画所で作成されたのであろう。なお、朱書「三月廿日領下ノ判官川内恵師」の「判官川内恵師」とは画所別当を兼ねた造東大寺司判官の川内恵師年継、日付下の「領下」とは造東大寺司政所の案主であり、画所領として画所に派遣された下道主と考えられる。なお、この朱書に自署がないのは画所内の文書であるためであらう。

16/398 ~ 399	16/397 ~ 398	中 障 （幗末）  （空）  【カキ】  印 封 カ ス	（紙端破損） 画工司移東大寺 ・ 佑竹志麻呂 画部河内石嶋左京 ・ 以前依中務省今月廿四日宣且送如件故移 天平宝字二年二月廿四日正七位上行令史黄文連、乙万呂 正正六位上辛別当	造東大寺司 召河内石嶋二月廿六日參 河内稻万呂 ・ 右得画工司状云被中務省宣稱為 彩色大仏殿之天井件人等令向東 寺者 ・ 仍差散位徒 左大舍人 ・ 秦黑人 七位下文部石床充使故召： 次官高麗朝臣 判官川内恵師 天平宝字二年二月廿	政所符 絵所領等 白緑廿三斤十兩二分 ・ 右彩色大仏殿廂之天井并須理等、板料下 充如件宜承知此状到奉行 次官高麗朝臣 判官川内恵師 主典美努連、奥万呂 天平宝字二年三月三日	4/262 ~ 263	4/260 ~ 261	4/259 ~ 260
						続修 43 2	続修 43 1	続修 16 10
						文書 「造東大寺司政所 符 絵所領等」	文書 「造東大寺司召文（案）」	文書 「画工司移 東大寺」



15/444 ~ 446		寫了
京下殿 妙慈傳安師主 ・ ・ ・ 日 卅 日 正 年 七 料 如 二 斗 二 米 加 月 今 取 水 米 森 丁 仕 九 料 如 二 斗 二 米 加 月 今 取 水 米 森 丁 仕 九		左方須理肆伯捌枚 合彩色画師壹拾貳人 河内石嶋伍拾陸拾功二百八十文 ・ ・ ・ 堺画師參人 上牛養貳伯陸拾捌枚功二百六十八文 ・ ・ ・ 木画壹人 塗白土貳人『塗白土須理板四百枚』 私部安万呂貳伯參拾貳枚功廿九文 ・ ・ ・ 以前自三月七日至十六日画師等行事如前 天平宝字二年三月十七日散位從七位下坂合部「蓑麻呂」 画師司長上從七位下上村主「牛養」 画部正八位上河内画師「石嶋」 〔余日約二三糧〕 『算勘下道主』
5/369 ~ 371		寫了
京下殿 妙慈傳安師主 ・ ・ ・ 日 九 料 如 二 斗 二 米 加 月 今 取 水 米 森 丁 仕 九 料 如 二 斗 二 米 加 月 今 取 水 米 森 丁 仕 九		右方須理板肆伯捌枚 合彩色画師壹拾捌枚 山広万呂肆拾捌枚 ・ ・ ・ 堺參人『堺須理花四百三根』 ・ ・ ・ 山広万呂壹拾壹枚 ・ ・ ・ 木画陸人『木画須理花四百四根』 ・ ・ ・ 大伴子松肆拾肆枚 ・ ・ ・ 白土貳人『塗白土須理板四百十六枚』 山広万呂壹伯捌拾肆枚 ・ ・ ・ 右起三月二日十六日至于惠師作行事注進上如件 天平宝字一年三月十九日「息長常人」 画丁司画部從八位上牛鹿惠師「足嶋」 『算勘下道主』
4/266 ~ 268		4/265 ~ 266
続集 29 5		続々修 43-9 裏 2
文書「画師行事功銭注進文」		文書「画師行事功銭注進文」

16/227 ~ 229	<p>宗伍 維 見石山院七十八番七十七番山石物下遷作庭足下遷山石物入遷四園車日園入遷十四人</p>
4/270 ~ 272	<p>「主道」下主案 天字平宝六八年九月一日・ 「主道」下主案 天字平宝六八年九月一日・</p>
5	<p>續々修 45-6 裏 6</p>
16/306 ~ 307	<p>(「造金堂所解(案)」) 用十千六百八十四貫五亩卅四文定一千六百卅九貫七百十三文 一十二貫四百五十文火作上二百卅九人功・ 左方蓮花枚式伯武拾肆板『功錢二貫四百四十八文』 彩色画師壹拾人『錢十貫七百九十二文』 河内石嶋廿四枚功百九十一文秦虫足・・・枚・河内古万呂・・・枚・ 堺画師貳人『錢五十六文』 上牛養百十二枚功廿八文・・・ 木画師貳人『錢廿八文』 上牛養百十二枚功十四文・・・ 塗白土貳人『錢廿二文』 上牛養百十二枚功十一文・・・ 花実壹拾肆果 堺朱砂并墨画師貳人『錢二百廿文』 上牛養七果功廿五文・・・ 塗白土緑青同黄画師貳人『錢六十文』 私部安万呂七果功卅五文・・・ 以前自四月二日至十日画師等行事如前 宝字二年四月十日散位從七位下坂合部「養万呂」 画師司長上從七位下上村主「牛養」 画部正八位上河内画師「石嶋」 『勸下道主』 (余白約五糧)</p>
文書「画師行事功錢注進文」	

[illegible]



15/478 ~ 479	吉重剛林尊忠申 ・・・日八 （画工司未選申送解案帳） 右二人姓名顯注申送如件以解 天平勝宝九歲四月七日 画工司未選、連黃文連黒人（案書） ・・・ 天平勝宝九歲四月七日 物部小鷹・・・ ・・・ 天平勝宝九歲四月七日 （余白約七糎）	15/476 ~ 478	龜岡寺主 ・・・日四廿 右一人式部位子 山広万呂 彩色花：根 錢：文：・・・ 堺花：根 錢：文：・・・ 塗白土板：根 錢：文：・・・ ・・・ 右十人司人 彩色花：根 錢：文：・・・ 別乙万呂 彩色花：根 錢：文：・・・ ・・・ 堺花：根 錢：文：・・・ 平群僧万呂 塗白土板：根 錢：文：・・・	15/474 ~ 476	龜岡寺主 ・・・日二廿 右一人式部位子 山広万呂 彩色花：根 錢：文：・・・ 堺花：根 錢：文：・・・ 塗白土板：根 錢：文：・・・ ・・・ 右十人司人 彩色花：根 錢：文：・・・ 別乙万呂 彩色花：根 錢：文：・・・ ・・・ 堺花：根 錢：文：・・・ 平群僧万呂 塗白土板：根 錢：文：・・・
13/219	續々修 38-8 裏 4	4/353 ~ 354	4/354 ~ 356		
文書「大仏殿廂繪画師作物功錢帳」(前半部)					



に「接続力」とあり接続が推定される。前述のように 文書は左方から、 文書は右方から画所領の下道主に送られた正文であることから、一次面作成後に画所で継文にされたと考えられる。

なお、短冊1 に示したように、 文書と 文書と 文書は続修に収められているものの『正倉院文書目録』でも接続が確認できない。しかし、熊谷公男氏が原文書の調査において、西洋子氏が二次面である「造石山寺所解移牒符案」の復原の結果、 文書、 文書は同時に紙背利用され内容的にも類似することから、貼り継がれていたものであったと指摘される<sup>6)</sup>。 文書は画工司で、 文書と 文書は造東大寺司政所で、 文書は画所で作成されたので、一次面作成時の貼り継ぎではなく、一次面作成後に継文にされたのであろう。

一方、 文書と 文書は続々修に収められているため『正倉院文書目録』による接続の復原ができない。そこで、これらの文書に関しては、二次面の接続を復原して後に一次面の復原を試みる。短冊3 に示したように 文書と 文書の二次面は『奈良博目録』によると一断簡から成るが、このことは「附箋」の存在からも確かめられる<sup>7)</sup>。

文書と 文書が収められている続々修四十五 六は六紙から成るが、「マイクロフィルム」により第一紙末に「十三帙三卷一」、第二紙末に「廿五ノ九 一」、第三紙頭に「卅二ノ十五三」の附箋が、第四紙にはなく、第五紙末に「廿六ノ六四」の附箋が、第六紙頭に附箋らしき紙片が確認できる。附箋の最後の漢数字が続々修成巻時の貼り継ぎ順を指示するものと思われ、第四紙に附箋がなく、第三紙に「三・第五紙に「四」とあつて数字が連続することから、文書の二次面である第五紙と 文書の二次面である第四紙とは、続々修成巻時の貼り継ぎではなく、続々修成巻前から一断簡であつたことが確認できる。また、「マイクロフィルム」を見ると二次面の継目に文字がまたがっており、 文書と 文書の二次面は二次面作成時に貼り継がれていたことが明らかである。次いで一次面を見ると、 文書と 文書は接続情報がなく、 文書と 文書という別々の料紙を二次面作成時に貼り継いで紙背利用した可能性もあるが、二次面作成時には既に貼り継がれていた一断簡を紙背利用した可能性も指摘できる。 文書内容と性格から

文書と 文書は 文書・ 文書と同様の文書であること、また、下道主による算勘の際に左方と右方とで合計功銭料が均等に配分されるよう考慮されている<sup>(8)</sup>ことから、下道主により一次面作成後に画所で継文にされたと考えられる。

さらに、短冊4 に示した 文書は、前述の上村氏により 文書・ 文書と同一内容の記載であることが明らかにされており、また、「マイクロフィルム」によると後ろ二紙（続々集三十八 八裏第二紙と第一紙）の継目に「以五文」の文字が明らかにまたがっていることから、 文書は画所で一次面作成時に三紙を用いて書かれたことが確認できる。

以上、 文書<sup>1</sup> 文書の文書性格と接続の復原を検討した結果、次のことが明らかとなった。i 文書と 文書は一次面作成後に下道主により造東大寺司政所で継文にされた。ii 文書・ 文書と 文書と 文書は一次面作成後に継文にされた。iii 文書と 文書、 文書と 文書は一次面作成後に下道主により画所で継文にされた。iv 文書は画所で作成された三紙から成る断簡である。

### 三 継文の機能と伝来

次に、 文書<sup>2</sup> 文書が各々継文に編成された過程とその目的を考察し、正倉院文書として現在に伝来した経緯を探ってみた。

文書は、この作画に参加予定の画工司の画工とその本質を把握する必要があり、 文書は正文の控えとして、また、各画工の出仕確認のために、造東大寺司政所案主の下道主により政所で継文にされ継目裏書が記されたと考えられる。なお、 文書の右端にも継目裏書「封印」が存在しており、 文書に見える式部位子・造東大寺司人・里人

に関する文書など、同様の文書が下道主により政所で貼り継がれていたのであろう。その後、作画開始に伴い、文書と文書を含む継文は、画所領として政所から画所へ派遣された下道主により画所にもたらされたと考えられる。そして、文書は政所から支給された顔料を把握するため、文書は正文の控えとして、文書・文書を含む継文と共に下道主により画所で継文にされたのであろう。

次に、文書、文書は、各作画終了後に、文書と文書が左方から、文書と文書が右方から行事報告として画所領の下道主に提出されて、下道主は文書と文書、文書と文書というように、作画毎に左方と右方の行事報告を継文にして算勘したと考えられる。そして、全作画終了後に各画工への功銭支給のため、文書、文書を含む継文を基に、所属別に画工毎の作業量・功銭料を記す文書が作成され、支給後に「已上卅六人功給既了ノ三月廿日領下ノ判官川内恵師」と朱書されて、文書、文書を含む継文は下道主により画所でまとめられたのである。

ところで、文書、文書が正倉院文書として現在に残ったのは、紙背が「造石山寺所関係文書」であることによると吉田孝氏は明らかにされたが、では、文書、文書はどのような経緯で造石山寺所に持ち込まれたのであろうか。吉田氏は、文書、文書に見える下道主を根拠に「造石山寺所の案主となる下道主」が持参したとされる。これに対して黒田洋子氏は、「実際の彩色関係の采配を振った下道主」が文書、文書を算勘した後に「彩色を管轄した写経所」に提出し、文書は写経所において「上馬養の手」により作成され、したがって、文書、文書は「上馬養によって保管・管理」され、造石山寺所へ行くように選択されたと述べられる<sup>9)</sup>。

しかし、文書性格と継文編成の過程から、文書、文書は造東大寺司政所と画所に関する文書であり、文書・文書と文書と文書、文書、文書は画所で下道主により継文にされたことは明らかである。さらに、西氏は、文書、文書の二次面は天平宝字六年七月十六日付「東大寺司作石山院所牒案」(『大日古』十五 二二三丁二

二四）を受けて作成され、また、岡藤良敬氏は、文書、文書はいずれも同時期（天平宝字六年八月八日頃から十二日頃）に造石山寺所で紙背利用されたと指摘される<sup>10)</sup>。つまり、文書、文書と文書、文書は石山寺造営の終わり頃のほぼ同時期に紙背利用されていることから、文書、文書を含む天平宝字二年の東大寺大仏殿廂絵作画文書は継文として画所領の下道主が保管・管理し、造石山寺所案主に起用された下道主により造石山寺所に持ち込まれたと考える。

## おわりに

奈良時代の画工研究についての再検討の端緒として、本論では天平宝字二年の東大寺大仏殿廂絵作画文書を探り上げ、文書性格の検討と接続の復原、継文の編成過程という視点から考察を試みた。その結果、文書、文書は下道主により継文とされ、下道主によって造石山寺所にもたらされた詳細が明らかとなったと思う。

なお、本論では紙幅の関係で検討し得なかったが、造石山寺所で紙背利用された文書、文書の他に、天平勝宝九歳（七五七）の作画文書も存在する（短冊4 続々修三十八 八裏第四紙など）。天平宝字二年の東大寺大仏殿廂絵作画文書と同様に下道主が継文にしたことが想定され、正倉院文書全体を視野に入れた文書内容・性格の検討や接続の復原などを今後の課題としたい。また、造東大寺司写経機構の事務帳簿に散見する画工についても、その編成と組織や令制画工司との関わりなど、未だ明らかにされていない面が多く、同様の視点から奈良時代の画工の実態をさらに検討する必要がある。

(1) 註

正倉院文書の原文書を直接に見ることができないため、正倉院文書研究にあたっては編年活字本の東京大学史料編纂所編『大日本古文書』、東京大学史料編纂所編『正倉院文書目録』(一九八七年出版開始)、宮内庁正倉院事務所編『正倉院古文書影印集成』(一九八八年出版開始)、奈良帝室博物館正倉院掛編『正倉院古文書目録』、『マイクロフィルム』を参照することになる。以下、『大日本古文書』は『大日古』、『正倉院古文書影印集成』は『影印集成』、『正倉院古文書目録』は『奈良博目録』と略称する。なお、『正倉院文書目録』と『影印集成』の既刊は続修別集までである。また、『影印集成』図版や、『マイクロフィルム』では『大日古』に記載される朱書・薄墨や、朱・墨の濃淡の違いが確認できないことが多く、国立歴史民族博物館所蔵のカラーコロタイプ印刷による複製での確認が必要であるが、今後の課題としたい。

(2)

上村順造「八世紀における画師の労働編成について 天平宝字二年、大仏殿廂絵作画作業の場合」、『名古屋大学日本史論集』上、吉川弘文館、一九七五年)

(3)

山口氏は、一通一通独立した料紙に書き記された文書を貼り継いだものや、あらかじめ貼り継がれた料紙が用意されているところに追い込みで文書案を書き継いでいったもの、両者が混在する様態を含めて広く継文と称される。山口英男「正倉院文書の継文について」、『古代文書論 正倉院文書と木簡・漆紙文書』、東京大学出版会、一九九九年)

(4)

天保年間に穂井田忠友が一次面に注目して正倉院文書を整理して以来、正倉院文書は正集・続修・続修後集・続修別集・塵芥・続々修に成巻された。その際、八世紀から伝来した文書の様態が破壊された部分もあり、正倉院文書研究にあたってはまず、文書の接続を復元する必要がある。接続の復元には、穂井田忠友の整理に始まる成巻前の二次面の復原と、二次面作成時に既に失われていた一次面の復原がある。山口氏前掲論文

(5)

原文書を調査できない我々が接続情報を得る手段として、『正倉院文書目録』と『奈良博目録』が挙げられる。『正倉院文書目録』により正集・続修別集について接続が確定である、もしくは、接続が推定される断簡が、『奈良博目録』により続々修成巻前の二次面の様態が明らかとなる。石上英一「正倉院文書目録編纂の成果と古代文書論再検討の視角」、『古代文書論 正倉院文書と木簡・漆紙文書』、東京大学出版会、一九九九年)、杉本一樹「正倉院文書の原本調査」、『古代文書論 正倉院文書と木簡・漆紙文書』、東京大学出版会、一九九九年)

(6)

熊谷公男「年次報告 古文書の調査」、『正倉院年報』五、一九八三年)、西洋子「造石山寺所解移牒符案の復元について 近江国愛智郡司東大寺封租米進上解案をめぐって」、『律令国家の構造』、吉川弘文館、一九八九年)

(7)

附箋には、続々修編纂前に仮編成された未修古文書の巻帙を表示する附箋(「帙巻」「ノ」等と記される)と、続々修成巻時の貼り継ぎ順を指示する附箋(「一」「二」等と記される)がある。後者の附箋を手がかりに、続々修成巻前の二次面の様態が明らかとなる場合がある。石上氏前掲論文

(8)

塗白土・塗白土緑青井同黄・堺画朱沙井墨の作画工程において、従来指摘されてきたような作画工程別の作業量に対する一律な功銭支給方法を探っておらず、その配慮はされているものの、むしろ、作画工程別の合計功銭料が左方と右方で均等になるように調整されている。

(9)

吉田孝「律令時代の交易」(『日本経済史大系』一、東京大学出版会、一九六五年)、黒田洋子「正倉院文書の一研究」天  
平宝字年間の表裏関係から見た伝来の契機」(『お茶の水史学』三六、一九九二年)

(10)

西氏前掲論文、岡藤良敬『日本古代造営史料の復元研究』(法政大学出版局、一九八五年)五一〇頁

大学院文学研究科博士課程後期課程